

豊山学報・第六六号
弘法大師御生誕千二百五十年
記念特別号 抜刷
令和五年三月発行
真言宗豊山派総合研究院

泰山考

田中文雄

泰山考

田中文雄

一、はじめに

ある一つの道でもつとも高く仰ぎ尊ばれる人を「泰斗」という。泰山と北斗のことを指し、山と星で最も優れた不動な二つをつなげた言葉である。

泰山は「太山」「大山」「岱」とも表記され、中国の五つの聖山「五岳」の一つである。山東省の中部、現在の泰安市・済南市・長清県、肥城県にまたがる名山である。

また、秦の始皇帝をはじめ多くの帝王が、王者による天地の祭り「封禪」をおこなった聖域であった。そのため、国家祭祀以外にも天地を繋ぐ特殊な場所として、死後の靈魂が集まる場所、冥界すなわち地獄としても信仰されていた。

地獄という言葉は、仏教語の奈落迦 *naraka*、泥犁耶 *niraya* の訳語とされ、「地下の牢獄」を意味する。『俱舍論』によれば、「宇宙の中心に須弥山があり、それを七金山が取り巻いており、その外に海が広がり鉄围山がある。七金山と鉄围山との間には四つの島があり、その一島の南瞻部洲に人間が住み、その地下に地獄があり、上下

無数の層をなす」と述べる。つまり、仏教の地獄は垂直方向に想定された。⁽³⁾

一方、道教では六朝時代から酆都、あるいは羅酆という地獄が考え出され、水平方向に想定された。この語の語源は明らかではないが、晋・葛洪の『抱朴子』対俗篇に記述され、梁・陶弘景の『真誥』卷一五闡幽微には、地獄の「六宮」の所在地や官制が述べられる。

道教はもとより仏教にも、泰山の神やその信仰が広まり、冥界観と死者救済のシステムが構築された。また、震災や疫病との関係も示す史料や経典もある。それらを漢文文献と先行研究を参考にしながら、多角的、総合的に考察したい。

二、泰山と地獄

泰山地獄の意味について、澤田瑞穂は「地獄にさらに泰山の二字を加えたのは、当時の中国人にとっては、ニラヤやナカラはもとより、地獄といつてもすぐには理解しにくかったので、便宜上、それに最も近い概念を含む泰山を借りて早わかりさせようとしたもので、仏書の原典に泰山などという地名があつたはずはない」と分析した。⁽⁴⁾

一種の百科事典の西晋・張華『博物志』には、「泰山は一名天孫という。天帝の孫という意味である。この山には主に人の魂魄を召し、人の生命の長短を知ることが出来る」とあり、靈魂を呼び出したり、寿命を支配する役割を持つと言う。

後の文献『後漢書』烏桓傳に「中国人の死者の靈魂は泰山へ帰る」とあり、『三國志』魏志・管輅傳に「恐らくは太山に至って鬼を治め」といった記述がある。また、同書方術傳（許峻傳）の占星術に優れた許曼の伝記

に「若いときに重病に罹った許曼は三年たつても治らず、泰山にお参りし命乞いをしたところ、道士の張巨君に会い方術を授かった」と書かれる。泰山は東岳にあたり、東方は五行説ではすべてが萌生する方角とされるから、生死にかかわり、神性を見いだしていた。同書卷一四の蔣濟傳の注には『列異傳』を引いて、「蔣濟の妻に夢に死んだ息子が現れ『今、泰山の伍伯（組長）をして苦しんでいるが、楽な地位に転任したいので、新任の泰山令（長官）になる孫阿に頼んでくれ』と告げた。そこで、蔣濟はまだ生きている孫阿に会い事情を話した。彼は死を恐れず、泰山令になることを喜び、死出の旅路についた。それから一ヶ月ほどして、息子はまた現れて『録事（文書係）になることができた』と告げた』という話も載せられる。泰山には官僚組織がり、それぞれの役分と上下関係が整然とあつたことがわかる。

仏教經典目録の『一切經音義』（大正藏卷五四、傍線は論者による。以下同じ）では、「泰山」の語は「隕 玉篇作隕、泰山其隕言墜下壞也」（四七五c）、「隕運 上徒回反、禮記泰山其頽乎、考聲壞也」（六〇三a）、「溜澗 左傳云、溜水出泰山、梁父西北入波也」（八五三c）、「臨溜 杜注左傳云、溜水名也、出泰山梁父西北入汶」（八七八c）、「嬴岱 范姁云、泰山也、五岳之長也」（九〇一a）とある。また、「太山」の語は「管子曰、昔者封太山禪、梁父者、有七十二家、梁父太山下小山也」（四三三c）、「隕壞 廣雅云隕壞也、禮記云太山其隕乎、說文隊也、從隕、亦作頽隕」（七二五a）、「臨沂 說文沂水、出東太山、南入泗、從水斤聲也」（八二三a）、「隕嶠 上隊雷反、考聲云毀也、廣雅壞也、禮記太山其隕乎、說文隊」（八三八c）、「涅槃 亦聲序、從水作溜水、名出太山也」（九〇九a）とある。ここに出てくる泰山は地名であり、中国文献からの引用である。

別の經典目録の『出三藏記集』（大正藏卷五五）の卷四に「以金貢太山贖罪經一卷」（三〇a）、卷六に「行者欲凝鸛反朴濟無外不循斯法者。何異刖夫之陟太山。無翅而圖昇虛乎」（四四b）とある。また、隋・法經等撰『衆經目録』（大正藏卷五五）に「閻羅王東太山經一卷」（二三八c）と、唐・彦鑄撰『衆經目録』（大正藏卷五五）に「以

金貢太山贖罪經一卷」(二四五b)、「以金貢太山贖罪經一卷」(二七一c)、「閻羅王東太山經一卷」(二七四b)と經典名をあげ、唐・靜泰撰『衆經目錄』(大正藏No.二二四八、卷五五)に「以金貢太山贖罪經一卷」(二〇六c)、「閻羅王東太山經一卷」(二二二b)と經典を含めて指摘する。

初期の漢訳經典の吳・康僧會(二五二～二八〇)『六度集經』(大正藏卷三)には多くの「太山」の語が見出せる(訳文は注に示す)。

卷一

・因化爲地獄。現于其前曰。布施濟衆。命終魂靈入于太山地獄。燒煮萬毒爲施受害也。爾惠爲乎。菩薩報曰。豈有施德而入太山地獄者乎(一a)⁽⁵⁾。

・罪人曰。吾昔處世。空家濟窮。拯拔衆厄。今受重辜處太山獄。(一a)⁽⁶⁾

・釋聞聖趣。因却叩頭曰。實無布施慈濟衆生。遠福受禍入太山獄者也。(一b)⁽⁷⁾

・又命近臣曰。爾疾殺我秤髓令與鵠重等。吾奉諸佛受正眞之重戒。濟衆生之危厄。雖有衆邪之惱。猶若微風。焉能動太山乎。(一c)⁽⁸⁾

・釋懷重毒惡熟罪成。生入太山。天人龍鬼莫不稱善。(三b)⁽⁹⁾

卷二

・對曰。太子德光周聞八方。上達蒼天下至黃泉。巍巍如太山靡不歎仰。(八a)⁽¹⁰⁾

・對曰。吾自彼來。舉身惱痛。又大飢渴。太子光譬。八方歎懿。巍巍遠照有太山。天神地祇。孰不甚善。(九c)⁽¹¹⁾

卷三

・捐佛至誠之戒。信鬼魅之欺。酒樂姪亂。或致破門之禍。或死入太山其苦無數。思還爲人猶無羽之鳥欲飛昇天。

(一三^b)₍₁₂₎

・佛告諸沙門。理家者吾身是也。彼蕩子者調達是。以鼠致富者槃特比丘是。調達懷吾六億品經。言順行逆。死入太山地獄。槃特比丘。懷吾一句。乃致度世。(二四^a)₍₁₃₎

・菩薩答曰。大善。卽雇如直持鼈歸家。澡護其傷。臨水放之。觀其遊去。悲喜誓曰。太山餓鬼衆生之類。世主牢獄早獲免難。身安命全如爾今也。(二五^a)₍₁₄₎

・然飢渴于六欲。猶海不足于衆流。以斯數更太山燒煮諸毒衆苦。或爲餓鬼。洋銅沃口役作太山。或爲畜生。屠割剝裂。死輒更刃。苦痛無量。(二五^c)₍₁₅₎

・延算之壽。福盡罪來。下入太山餓鬼畜生。斯謂之苦。(二六^a)₍₁₆₎

卷四

・象曰。吾痛難忍。疾取牙去。無亂吾心令惡念也。惡者死入太山・餓鬼・畜生道中。夫懷忍行慈。惡來善往。菩薩之上行也。(二七^b)₍₁₇₎

・但以出遊翼從甚衆。導臣馳除。黎庶惶懼。終入太山燒煮割裂。積六萬年。求死不得。呼嗟無救。當爾之時。內有九親。表有臣民。資財億載。衆樂無極。寧知吾入太山地獄燒煮衆痛無極之苦乎。生存之榮。妻子臣民。孰能分取諸苦去乎。惟彼諸毒其爲無量。每壹憶之心怛骨楚。身爲虛汗。毛爲寒豎。言往禍來。殃追影尋。雖欲發言懼復獲咎。太山之苦難可再更。是以縮舌都欲無言。始十三年。而妖導師令王生理吾。懼大王獲太山之咎。勢復一言耳。(二〇^c)₍₁₈₎

・佛語諸沙門。彌蘭者吾身是也。所以然者。未奉三尊時。愚惑信邪。母沐浴著新衣臥。吾蹈母首。故太山以火輪轢其首耳。(二一^b)₍₁₉₎

・佛告諸沙門。彌蘭出太山獄。閉心三惡。絕口四刀。檢身三尤。孝順父母。親奉三尊(二一^b)(^c)₍₂₀₎

卷五

· 若覩彼有愚即貪嫉。貪嫉處內。瞋恚處外不覺止。其爲狂醉。長處盲冥矣。展轉五道。太山燒煮。餓鬼畜生。積苦無量。(二四^a)⁽²¹⁾

· 飲畢意悟曰。彼買此池以華奉佛廟。水果自供。吾飲其水。不告其主。斯即盜矣。夫盜之爲禍。先入太山。次爲畜生。屠賣于市以償宿債。若獲爲人當爲奴婢。吾不如早畢於今無遺後患矣。(三〇^a)⁽²²⁾

· 愚夫重闇不明去就。以惡心向佛沙門。梵志截手拔舌者。斯一世之苦。妄以手捶。虛以口謗。死入太山。太山之鬼拔出其舌。著於熱沙。以牛耕上。又以然釘釘其五體。求死不得。殃惡若此。順行無邪。菩薩法忍度無極行忍辱如是。(三〇^b)⁽²³⁾

· 衆祐曰。釋罪畢也。王罪興矣。却後七日太山鬼以火燒王及其臣民。王罪難救猶釋禍難攘矣。(三一^b)⁽²⁴⁾

· 向中之時日出炙陽燄。陽燄化爲火。始自王舟。大(太)山鬼神以雲集礮礮。率土生入太山地獄。(三一^c)⁽²⁵⁾

卷六

· 王驚曰。斯何畜生而懷弘慈。沒命濟物不以爲艱。斯必天也。王善鹿之言。喜而進德。命國內曰。自今日後恣鹿所食。敢有犯者罪皆直死。王還元后聞王放之。恚盛心碎。死入太山。(三三^b)⁽²⁶⁾

· 所處之國。其王無道貪財重色。薄賢賤民。王念無常。自惟曰。吾爲不善死將入太山乎。何不聚金以貢太山王耶。於是斂民金。設重令曰。若有匿銖兩之金。其罪至死。如斯三年。民金都盡。王訛募曰。有獲少金以貢王者。妻以季女賜之上爵。童子啓母曰。昔以金錢一枚著亡父口中。欲以賂太山王。今必存矣。可取以獻焉。母曰可。兒取獻焉。王令錄問所由獲金。對曰。父喪亡時。以金著口中。欲賂太山。實聞大王設爵求金。始者掘塚發木取金。王曰。父喪來有年乎。對曰。十有一年。日爾父不賂太山王耶。對曰。衆聖之書。唯佛教眞。佛經曰。爲善福追。作惡禍隨。禍之與福猶影響焉。走身以避影。撫山以關響。其可獲乎。王曰不可。曰夫身即四大也。

命終四大離靈逝變化。隨行所之。何賂之有。大王前世布施爲德。今獲爲王。又崇仁愛澤及遐邇。雖未得道後世必復爲王。(三六^(c))

・調達亦爲魔天王。行四天下。教人爲惡從心所欲。無有太山殃禍之報。行逢菩薩。問曰。子何行乎。答曰。教民奉佛修上聖德。調達曰。吾教民恣欲二世無禍。爲善勞志無益於己。菩薩曰。爾避吾道。答曰。子爲善猶金銀。吾尚惡猶剛鐵。剛鐵能截金銀。金銀不能截鐵。子不下道吾斬子矣。調達惡盛禍成。生入太山。(三七^(a))
 ・伯曰。夫殘一人者其罪百劫。龍吞一國。吾懼恒沙劫畢。厥殃未除矣。苟貪黷味斯須之利。不覩太山燒糞之咎。吾心愍然。(三七^(b))⁽²⁹⁾

卷七

・菩薩心淨得彼四禪。在意所由。輕舉騰飛。履水而行。分身散體。變化萬端。出入無間存亡自由。摸日月。動天地。洞視徹聽靡不聞見。心淨觀明得一切智。未有天地衆生所。十方現在衆心所念。未萌之事。衆生魂靈爲天爲人入太山・餓鬼・畜生道中。福盡受罪。殃訖受鷄。無遠不如。(三九^(b))⁽³⁰⁾

・道人念曰。夫生有死。人物猶幻。會即有離。神逝體散。吾豈得止獨不如彼乎。覩之愴然。一心得禪。或見久死體骨消滅。泥土同塵。深自惟曰。吾體方爾。一心得禪。或以聞太山湯火之毒。酷裂之痛。餓鬼飢饉積年之勞。畜生屠剥割截之苦。存之愕然。一心得禪。(四〇^(a))⁽³¹⁾

・奉佛覩經。親沙門衆。採執佛戒懷而行之。遠離三惡。心念善。口言善。身行善。仰上三惡。永興三善。長不令更太山・地獄・餓鬼・畜生窮苦險處。安以無極之福堂。(四〇^(b))⁽³²⁾

総じて、太山は地獄のことを指し示している。この様な泰山の神格化は、唐代以降の葬送儀礼にも影響する。十王信仰は中国各地に広まったと言われ、死者の追善供養や、預修（逆修）の法要では、各忌日にあわせて十人の冥王が配当された。十王の代表格は閻魔である。この神はインド神話にあるヤマ神であり、仏教以前の古

い宗教に起源をもつ⁽³³⁾。インドに輪廻転生の思想が深く根を下ろすと、冥界の主というよりも獄卒を従えて罪ある死者を罰する地獄の王となったと言われる。その閻魔が中央アジアを経て中国に伝来すると、他の（九人の）冥王を加えた冥界裁判官となった。審判の様子を描いた「十王図」は、中央アジアにも作例が多く、マニ教の影響があつたとの説もあるが確証はない⁽³⁴⁾。

仏教や道教では、十王の冥府を解説する経典が出来た。仏教では、唐僧・道明和尚（襄州・開元寺、八世紀）の入冥譚に基づき、四川の沙門・藏川（成都府・大聖慈寺、年代不詳（九世紀か？））が撰した疑偽経典があり、『續藏』には『佛說預修十王生七經』と『佛說地藏菩薩發心因緣十王經』⁽³⁵⁾が収録される。

一方、道教でも、仏經を模倣しながら『太上救苦天尊消研滅罪經』（SN三七八）、『元始天尊說酆都滅罪經』（SN七二）や『地府十王拔度儀』（SN四六六）などの経典が作られた。

これらの経典では、次表のように、十王はそれぞれが地獄内の宮殿に住し、忌日ごとに死者を審判し刑罰を決定する。しかし、閻魔王と泰山王以外は出自がはっきりしていない。泰山王の神が、満中陰の重要な忌日の冥王として選ばれている事は、意図がある⁽³⁶⁾と考える。

忌日	冥殿	佛說地藏菩薩發心因緣十王經	太上救苦天尊消愆滅罪經
初七日忌	第一殿	秦廣王 不動明王	泰廣大王 太素妙廣真君
二七日忌	第二殿	初江王 釋迦如來	初江大王 陰德定休真君
三七日忌	第三殿	宋帝王 文殊菩薩	宋帝大王 洞明普靜真君
四七日忌	第四殿	五官王 普賢菩薩	五官大王 玄德五靈真君

三、如泰山崩

五七日忌	第五殿	閻魔王 地藏菩薩	閻魔王 最勝耀靈真君
六七日忌	第六殿	變成王 弥勒菩薩	變成大王 寶肅昭成真君
七七忌	第七殿	太山王 藥師如來	泰山大王 玄德妙生真君
百日忌	第八殿	平等王 觀音菩薩	平等大王 無上正度真君
一周忌	第九殿	都市王 勢至菩薩	都市大王 飛魔演慶真君
三回忌	第十殿	五道轉輪王 阿彌陀如來	轉輪大王 五化威靈真君

釈迦の伝記の『佛所行讚』には、「醉象奮いて狂怒するも、仏を見て心則ち醒め、投身仏足礼すること、なお泰山崩れるが如し」（大正藏卷四、四一a）とある。それに対応する『ブツダチャリタ』には、「かくしてかの憤怒せる象が近づいてきたが、牟尼の威力によって正気に帰り、青黒い山が雷電によって粉碎されたように、体は頰れ頭は垂れた⁽³⁷⁾」となっている。ここでは「青黒き山」が「泰山」と漢訳されていることになる。

さて、五體投地はインド伝来の敬礼法である。『大智度論』卷一〇〇に「禮に三種あり、一は口禮、二は膝を屈して頭地に至らず、三は頭地に至る。これ上禮なす」（大正藏卷五一、八七七c）とあり最上の敬礼に当たるとある。

玄奘の『大唐西域記』卷二に「致敬之式、其儀九等。一發言慰問、二俯首示敬、三舉手高揖、四合掌平拱、五屈膝、六長跏、七手膝踞地、八五輪俱屈、九五體投地」（大正藏卷五一、八七七c）と、九種類の敬礼法の中で最も鄭重な

方法だという。

五體投地を行う時の觀念作法は、『離垢慧菩薩所問禮佛法經』に「初めに右膝を、次に左膝を、續いて右肘と左肘を地に着け、二掌を舒べて額を過ぎ、空を承けて佛足に接するように觀念し、最後に頭を地に着ける」（大正藏卷一四・六九九a）と記述され、この拜法は仏足礼であつたことが解る⁽³⁸⁾。

また、三世紀中頃に訳出された支謙『梵摩瑜經』には「即興正五體投地、三頓首、諸佛歸法歸命聖衆」（大正藏卷一、八八四c）と、五體投地の後、三宝に対して頓首して帰依を誓うとある。

頓首は『周禮』（春官・大祝）に「辨九拜、稽首、頓首、空首、振動、吉拜、凶拜、奇拜、褒拜、肅拜」とある。鄭玄の注に「頓首、拜首叩地也」とあるから、頭額を地に打ちつける行為であつた。跪座して大地に頭を打ちつける方法は、時代によつて変化があつた⁽³⁹⁾。

漢訳仏典中には多くの「泰山が崩れるような」行為がみられる。

①『太子須大拏經』（大正藏卷三）

・妃聞太子語。便感激躋地如太山崩。宛轉啼哭。而不可止。（四二二c）

②佛說菩薩睺子經（大正藏卷三）

人父母聞之。舉身自撲。如太山崩。地爲震動。（四三七c）

③佛說睺子經（大正藏卷三）

・耳父母聞之舉身自撲。如太山崩地爲大動。（四三九b）

・耳父母聞之舉身自撲。如太山崩地爲大動。（四四〇a）

・耳父母聞之舉身自撲。如太山崩地爲大動。（四四三a～b）

④大寶積經（大正藏卷一一）

・吾獨何覺窮底得籌。五體投地猶太山崩。(五二b)

⑤摩訶摩耶經(大正藏卷一二)

・舉身投地如太山崩。悲號慟絕而作是言我……(二〇一三a)

⑥禪祕要法經(大正藏卷一五)

・心懷愧悲咽無言。舉身投地如太山崩。即於佛前。四體布地。向佛懺悔(二四三a)

⑦佛說觀佛三昧海經(大正藏卷一五)

・作是思惟已。如太山崩。五體投地號泣雨淚。(六五五b)

・隨佛語懺悔諸罪。佛法衆中。五體投地如太山崩。向佛懺悔心眼得開。(六六〇b)

・說是語已向佛懺悔。五體投地如太山崩。悲號雨淚對佛啼哭。(六一一b)

上記の行為は、身体的にかなり過激なものである。②、③、⑤、⑥では「拳身自撲」と、④、⑦では「五体投地」と関連づけられ懺悔に関わる。

懺悔とは「戒を犯した過ちを悔い改め、再犯しない事を表明する」ことが目的である。必ずしも肉体的苦痛を要求されるものではない。しかし、『天台菩薩戒疏』(大正藏卷四〇)巻上では、「然懺悔法有其三品。上品懺者舉身投地如太山崩毛孔流血。中品懺者自露所犯悲泣流淚。下品懺者隨師口言陳前罪咎」(五八二b)とある。つまり、「懺悔の法は三種類がある。上品の懺は拳身投地、如太山崩で、毛孔より流血する。中品の懺は自ら犯すところを露わにし、悲泣流淚する。下品の懺は師の口言に随い、前の罪咎を陳ぶ」と言い、如太山崩が最も優れた懺悔だと述べる。

また、隋の費長房が開皇十七年(五九七)に撰述した仏教經典目錄『歷代三寶記』(大正藏卷四九)巻一二に『占察經』という經典を解説する。内容は「広州の僧が『占察經』による塔懺法という占術と、男女が混じり合っ

ておこなう自撰法を修行した」と言う。また、「青州でも同じ行法が、他の居士によっておこなわれた」（二〇六c）と記述する。あやしげな占いと、男女が同席する過激な懺悔が邪教視され官憲によって、調査を受ける事件に発展した。この事件は開皇十三年（五九三）に発覚したもので、『歴代三寶記』編纂の数年前の出来事であり、同書の記述はかなり正確であろう。

その事件記事中に「塔懺法は『占察經』に依拠しており、自撰法はもろもろの經典に書かれる五體投地すること、太山の崩れるが如き方法である」（二〇六c）とも書かれる。自撰は「自己が匍伏」することとされるが、事件にかかわった回答者は太山を引き合いに出して説明している。つまり、このような懺悔が一般的に知られていたことになる。

四、流血する拝法

道教の自搏と仏教の自僕について、楊聯陞は「二つの行方は思想的にも形式的にも関連した苦行法で、自僕と自搏の影響を受けてできあがった」とした。⁽⁴⁰⁾ 胡適は「仏教の自撰は自己が匍伏することで、泥面に頬を打つ苦行法ではなく、楊聯陞の引く道教の自搏の用例は同義に解釈できない」と評論を加え、これに対して楊聯陞はあらためて論を展開した。⁽⁴¹⁾

吉岡義豊は、新たに六朝時代訳出の九種の仏教經典と道教經典の用例を新資料として、楊聯陞の説を批判した。⁽⁴²⁾ 成瀬隆純は唐代の浄土教祖師たちの「自撰懺悔」受容の解明を試み、浄土教研究を大きく転換させる問題提起をした。⁽⁴³⁾ 上記の論考を基に、論者自身も五体投地と自撰を整理した。⁽⁴⁴⁾ また、遠藤純祐は『占察經』との関係で、「如太山崩」について述べる。⁽⁴⁵⁾

如太山崩と言われる拝法は、「山が崩れる」ように身体をなげうつ自虐的な行為であった。五輪（頭・両手・両足）がどう地に触れるかに関係なく、歡喜や悲嘆、或いは懺悔のために、自己の身体を大地に擲ったことが解る。

また、道教經典にも同等な行為が見られる。『太上洞玄靈寶業報因緣經』（SN三三六）には、

今日道場大衆、各發至誠、於我御前、發露懺悔、即得高眞垂憫、衆聖哀憐、汝等九祖以來、無量罪業、五體投地、如泰山崩、拜諸上聖、萬罪消滅。（卷三、九a）

とある。先祖からの罪業を消滅するための懺悔の方法であり、仏教を模倣したものである。

別に『太上大道玉清經』（SN一三二二）の「自撲」に関する記述では、

爾時諸戎、重觀浮雲之上、大悲天尊、威儀侍從、大驚恐、自拔頭髮、悔過責己、劈其準、遍體流血、踊身自撲、猶如山崩、觀此希有、求欲捨眼、燒身破骨、以爲供養（卷七、一四a）

とあり。また同経には、

爾時天尊、說此經已、五百外道、柯葉惟等、悉捨邪法、肉袒求哀、從道出家、欲求濟度、悔過自責、遍體血流、拔除鬢髮、如鳥鍛翻、踊身自撲、猶如山崩（卷一〇、二九b）

とある。これは外道（つまり仏教）の所作と語られるが、流血しながらの激しい懺悔の姿は「如太山崩」と同じ行爲である。⁽⁴⁶⁾

懺悔は『四分律比丘戒本』に「若自知有犯者、即應自懺悔」（大正藏卷二二、四七七c）とあるように、犯戒に対して過非を悔い改め、再犯しないことを表明することであり、必ずしも肉体的苦痛は必要ない。⁽⁴⁷⁾

早い時期からいきなり流血をとまうような過激な拝礼として記述されていたわけではなく、仏に対する歡喜や、死に対する悲嘆の極まった感情を示していた。それが、過激な懺悔の意味で記述されるようになるのは、五世紀以降ではないだろうか。

この種の過激な懺悔が登場するには、以前からあった中国的な行為が展開したと考える。懺悔の苦行を受け入れる素地は、中国の伝統的礼法を想定できる。体を大地に投げ出す動作で、頭額を強くぶつければ当然血が流れる。これは頓首の姿である。頓首は、先ず跪いて手を拱して、胸の前に両手を重ね合わせたまま頭を下ろし、頭額を急激に地を叩く拝法である。この原形は「頭額を物に激突させ自殺する」という特殊な習俗による。

この拝法は元もと凶札に用いられ、近親や主長の死にあたって、哭泣悲哀して殉死を図ることを象徴しており、自らの死をもつて罪を請い哀訴嘆願した。この文体は上奏文の末尾に畏敬を表す常套句ともなった。⁽⁴⁸⁾

また、頓首は「額」あるいは「稽額」とも言われ、後漢時代以降は叩頭とも称され長く存続した。叩頭により流血する事例は、『史記』卷一二六（滑稽列傳・西門豹傳）に「叩頭して且つ破り、額血は地に流れ、色は死灰の如し」とあり史書の中にはしばしば現れる。⁽⁴⁹⁾

道教でも、叩頭が宗教的拝法で多く用いられた。『太平經』（SN一一〇）では、「叩頭自搏而啼鳴」（卷一一、七b）や「迎醫解除、常垂涕而言、謝過於天、自搏求哀、叩頭於地、不避瓦石泥塗之中、輒得令父母平安」（卷一二四、一b）などの記載がある。

また、『洞玄靈寶長夜之府玉匱明真科』（SN一四一一）には、「東九拜言……畢脫巾叩頭自搏、各八十一過止」（二七b～一八a）、「次南向三拜言……畢叩頭搏頰、各二十七過止」（二八a～一九b）、「次西向七拜言……畢叩頭自搏、各六十三過止」（一九a～b紙）、「次北向五拜言……畢叩頭搏頰、各四十五過止」（一九b～二〇a）、「次東北向一拜言……畢叩頭搏頰、各九過止」（二〇a～b）、「次向東南一拜言……畢叩頭搏頰、各九過止」（二二紙）、「次向西南一拜言……畢叩頭搏頰、各九過止」（二二a～b）、「次向西北一拜言……畢叩頭搏頰、各九過止」（二二a～b）、「次向上方三十一拜言……畢叩頭自搏、各二百八十八過止」（二二b～二三b）、「次向下方十二拜言……畢叩頭自搏、各百二十過止」（二三b～二四a）と、十方（四方・四維と上・下）に対する拝礼が書かれる。各方向に帰命を誓う

言葉を言い終わった後に、「叩頭自搏」や「叩頭搏頰」をすることである。また、『老君音誦誡經』(SN 七八五)では、「辰巳之日、天清明、夜半北向懺過、向天地叩頭百下、三十六搏頰、三過三百下、以爲常則」(八b)と書かれる。

陸修靜の『洞玄靈寶五感文』(SN 一二七八)の塗炭齋⁽⁵⁰⁾についての記述に「又三元塗炭齋、……法於露地立壇、安欄格、齋人皆結同氣質者、悉以黃土泥額、被髮繫著欄格、反手自搏、口中銜璧、覆臥於地、開兩脚相去三尺、叩頭懺謝」(七b)とある。つまり、額に黃土を塗り、儀礼壇に髪を縛つて、逆手で自搏し、口に玉を含み、大地に横臥し、両足を開いて叩頭すると言う非常に自己毀損的な懺悔である。

『眞誥』(SN 一〇一六)に「陸(修靜)聞之、於是心開意悟、因叩頭自搏」(卷一四、一一a)、「乃叩頭流血、涕淚公連、悲喜自搏、就之請道」(卷五、六a)とあり、後者は叩頭による流血をとまなう記述である。叩頭が単独でも宗教的拝礼であったことは、「叔期知是神人、因拜叩頭、就請要訣」(卷五、一〇a)、「朝朝朝拜、叩頭求乞長生」(卷七、七b)、「仍向室拜叩頭訖」(卷一八、一四b)、「併手口額」(卷一〇、九a)とあることから自己毀損をとまなっていた。

常ならざる行為を示し、自らの身体を象徴的に供犠として祈る姿は、『呂氏春秋』(順民)の「是において其の髪を翦り、その手を躪して、身を犠牲となし」と、殷の湯王が干魃に際して天に祈禱した故事にも表されている⁽⁵¹⁾。髪⁽⁵¹⁾の毛をザンバラにしたり、毀損することの解釈は多岐にわたるが、上記の故事は罪人の姿をとり、贖罪を祈願すると考える。泰山が崩れるような過激な拝法は、従前からあった罪人のかたどつて、天の許しを願うといった一連行為が受け皿となり、仏教や道教の儀礼の中に取り入れられた。

五、泰山崩壊と疑偽經典

泰山は天と地を繋ぐ場所で、不動の象徴と考えられた。しかし、古くは『禮記』檀弓上に「泰山それ頽^ふれるか、梁木壞れるか、哲人それ萎れるか」とある。これは比喩的な表現かもしれないが、「太山が崩れる」可能性を示唆している。また、『洛書摘六辟』には「太白主心、太山崩、後九年大飢⁽⁵³⁾」とある。この「山崩れにより農業被害等が拡がり、食糧危機がおこる」という表現には、現実の反映があると考えられる。

泰山崩落の記述は、歴史書（正史）の中にも残される。

『晋書』（卷二十九・五行志）には、

〔晋の泰始〕四年（二六八）七月、泰山崩墜三里、京房易傳曰「自上下者爲崩、厥應泰山之石顛而下、聖王受命人君虜」、及帝晏駕、而祿去王室、惠皇懦弱、懷・愍二帝俱辱虜庭、淪胥於北、元帝中興於南、此其應也。とある。この二六八年七月の地震による泰山崩落の記録は、『宋書』（卷三十四・五行下）にも同じ記事がある。

この時期、太行山も崩れたようで、前二書とも「魏元帝咸熙二年（二六五）二月、太行山崩、此魏亡之徵也。其冬晉有天下」や、「武帝泰始三年（二六七）三月戊午 大石山〔宋書〕では太行山〕崩」とある。どうも泰山を取り巻く山々でも群発地震が発生したようである。

これより約二百五十年後、またもや山やまの崩壊は繰り返された。『魏書』卷一二上、靈徵志によれば、景明元年（五〇〇）の太陰山、同四年（五〇三）と正始元年（五〇四）の恒山崩落に続き、永平四年（五一二）には太行山脈沿いに群発地震が発生した。⁽⁵⁴⁾

同書には、延昌三年（五一四）には、

延昌三年八月辛巳、兗州上言、泰山崩、頽石湧泉十七處。泰山帝王告成封禪之所也。而山崩泉湧、陽黜而陰盛、岱又齊地也。天意若曰、受禪讓者、齊代魏之徵也。

と記述される。「石が頽れ（十八カ所）で」泉が湧く」「山が崩れ、泉が湧く」とあるのだから、これは震災であつたと考へて間違いない。

觀念的には崩壊しない泰山であつても、現実的には地震で崩れることがあつた。当時の人々は自然現象としてではなく、天のくだす災異と感じていた。

しかも、うち続く地震と相俟つて、人間や家畜、農作物の損害、二次災害、疫病の流行もあつた。人びとは恐怖を懷くとともに厭世的感情や、現状の改変を希求する願望を持つたことは想像に難くない。泰山崩壊は、天地崩壊の前兆として、この世の終末を予感したとも言える。崩壊により、冥界との出入り口が壊れ、忌むべき者が現世に流入してくるという事も信じられた。

敦煌出土の非常に短い經典の『勸善經』は、三十点近く発見されている。

スタイン本は、

勅左丞相賈。恍領下諸州善之衆生。每日念阿彌陀佛一千。□斷惡行善。今年大熱無人收苧。有數衆病死。第一瘡病死。第二天行病死。⁽⁵⁵⁾第三白痢病死。第四赤眼病死。第五人產病死。第六水痢病死。第七風病死。今勸衆生寫此經免一門難。寫本六親。見此經不寫者滅門。門上榜之得過此難。無福者不可得見此經。其經從南來。正月八日雷電霹靂。空中有一童子。年四歲。又見一老人在路中。見一蛇身萬尺。人頭鳥□遂呼老人曰。爲太山崩。要女人萬萬衆須得片萬萬願著病難差。寫此經者得免此難。不信者但看四月一日三家使一牛五男同一婦僧尼巡門難。寫此經流傳聖人眞言。若被？風？却不免難。相勸阿彌陀佛不久見太平時。（S 四一七 大正藏卷八十五、一四六二a）

とある。

ペリオ本は、

勅 左丞相賈耽（七三〇〜八〇五）、恍頌下諸州普勸衆生、毎日念阿彌陀佛一千、□斷惡行善。今年大熱無人之収蒔、有數病死第一瘡病死、第二天行病死、第三赤白痢病死、第四赤眼病死、第五人産病死、第六水痢病死、第七風病死。今勸衆生寫此經免一本一門難。寫兩本免六親。見此經不寫者滅門。門上傍之得過此難。無鷄者不可得見此經、從南來。正月八日雷電霹靂、空中有一童子、年四歲。又見一老人在中、見一蛇身萬尺人頭鳥足。遂呼老人曰、爲太山崩、要女人萬萬衆、須得牛萬萬頭、願著病難差。寫此經者得免此難。不信者但看四月一日、三家使一牛五男（易）同一婦僧尼巡門。勸寫此經流傳、若卒風却不免此難。聖人流傳眞言、報諸衆生。莫信邪言見聞者、通相勸念阿彌陀佛、不久即見太平時。貞元十九年（八〇三）甲申歲正月廿三日〔貞元甲申は二十年（八〇四）〕（P二六五〇 牧田諦亮『疑經研究』七七頁、読点は論者）とある。

この經典は厄除けの護符の役割をはたしたようである。民間神の混入も見られ、写經の重要性和家族内の利益を説き、念仏も重視される。

別に、五世紀後半以降流布したと思われる『仏図彙所化經』という經典があり、

（北魏）和平四年（四六三）正月一日、河内郡温県（黄河の北岸）の劉起之ら十五人ばかりの者が木材の切り出しに山に入ったところ、にわかに空模様がおかしくなつて、つむじ風が巻き起こつた。その激しさに何が何だかわからなくなつて道に迷ひ、山中で風の止むのを待つていた。

ところが、急に太陽が顔を出して、あたりが明るくなるや、一羽の鴻鵠おおくが西南の方角から飛来してきて地上に舞ひ降りた。と、見る間に、化身して一人の老人となつた。その老人は手に九節の杖をもち、口を開

いて次のようなことを話した。

「私は仏図棠であるぞ。わしがやって来たのは、お前たちに「これから起ころうとしている」罪福のことを教えてやろうと思つたからじゃ。実は泰山の東門が崩れたため、泰山では「泰山の神が」鬼兵千九百万人（？）に赤い棒と赤い縄を持たせてこの世に遣わし、この世の九万男女三十万人（？）を捕まえて、東門の修復仕事をさせようとしておる。また十千九万人の女たちには「鬼たちの」袍襖ほうあきを繕わせようと目論んでおる。だから、この世ではこれから毒腫の病が流行するであろう。この病気に罹ると十人のうち九人は死ぬという疫病で、「家柄などに関係なく」どんな家にも降りかかってくるぞ」。

「そこでお前たちは「この毒腫の病を防ぐために」すぐさま福（善行）を積んで、度世どせ（救済）を得るようにせねばならぬ。そのためには村の大小に従い、三家五家ごとに集まって「龍虎舌餅りゅうこげつひ」を作り、一人につき各おの七枚を食するがよい。また一日一回かならず転經てんきやう（読經）し行道し、度世を得るようにせよ。もしわしの言うことを誹謗して信じない者は、必ず災難が降りかかり、黄病疫病にとりつかれて、七々八ヶ月（？）苦しみ続け、それでも決して度世することは出来ないと覺悟しておけ」。

「この仏図棠のお告げに従つて」男も女も老いも若きも、皆この經（お告げ）を各自書き写して、一通はいつも身につける（？）ようにし、また「他の一通は？」近隣の人に与えよ。そうすれば殃禍むさわひは降りかからず、寿命は延び、悩み苦しみから免れることができる。この經を見て書き写した者はその人自身に福があるが、見るだけで書き写さない者は生きている間じゅう長患いに苦しむことになる。また書き写しても他の人に伝えない者は、一門死滅の憂き目に会おう。この經を見た者は「以上のことをよくわきまえて」速やかに通読せよ」。⁽⁵⁶⁾ 如律令

と記述する。この『仏図棠所化經』は、仏教に道教や民間信仰が混入した最たる經典と言えよう。

六、結 び

泰山は地獄に最も近い概念として、地獄の漢訳語として定着した。その過程で、仏教經典に泰山地獄が登場する。それに倣って道教經典にも同等な意味で記述され、新たな地獄の概念が移入された。

唐代以降盛んになったと思われる追善や餘修（生前法事）の十王法事がある。この十王儀礼は、仏教の七日ごと七回の生と死を繰り返す過程と、中国の葬送習俗である卒哭（百日忌）、小祥（一周忌）と大祥（三回忌）が習合したものである。その泰山王が満中陰（四十九日忌）の冥王であつたことは、追善法事の成立に重要な意味を持つと考える。

泰山が地獄の意味で使われたとしても、「如泰山崩」といった拝法はどう形成されたのであろうか。この拝法は「罪人を模つて罪の許しを得る」という複雑な中国の礼法が根底にある。形式的ないし実際の自己毀損が懺悔や祈願へと発展した。

古文書に現れる泰山での地震の記録は、『竹書紀年』に「夏王發七年（紀元前一八三二年）陟、泰山震」が最初だとい⁽⁵⁷⁾う。また、泰山が崩壊したことは、多くの正史に記述され、歴史的事実であつたことが確認できる。この自然災害は、人的被害や農畜産物被害を引き起こし、疫病なども流行した。その救済のために、護符に近い疑偽經典が創られて民衆に広まつた。

泰山は中国人の中で認知度が高く、宗教指導者や民衆にとつては理解しやすかつた。それが、多岐にわたる習俗を形成し中国撰述經典（疑偽經典）が創作された。これらの經典群は、本来の仏教教理とは異なるが、民衆に大きな影響を残した。

註

- (1) 東岳・泰山、南岳・衡山、西岳・華山、北岳・恒山、中岳・嵩山。
 - (2) 天命を受けた皇帝が、泰山の頂に天を祭るのが「封」、麓の小丘梁父で地を祭るのが「禪」であり、王朝国家の成立と永続を祝福する。秦・始皇帝以前には七十二人の帝王がこの儀式を行ったと『史記』には伝えられている。その歴史は三皇五帝によつて執り行われたのを最初としているが、伝説の時代であるため詳細は不明である。確実には秦の始皇帝が最初で、前漢の武帝、後漢の光武帝、唐の玄宗などが実施した。
 - (3) 『阿毘達磨俱舍論』(大正藏No.一五五八 卷二九)、地獄をめぐる宇宙観は同書卷一一に詳しい。
 - (4) 澤田瑞穂『中国の泰山』(講談社、一九八二年)による。
 - (5) 訳文は『全訳六度集經』(六度集經研究会訳、法蔵館、二〇二二年)を参考にした(以下同じ)。
- 地獄を化作して、菩薩の前に出現させて、「布施をして衆生を救済しても、命が終わると魂霊は太山地獄に入る。焼かれ煮られてあらゆる苦しみを味あうことになる。施しを行っても害を受けるのだ。あなたはそれでも恵みを施すのか」と言つた。菩薩は、「どうして徳を施して太山地獄に入る者がありましょうか、と答えた」。
- (6) 罪人は「私は昔、生きていたときに、家を空っぽにして困窮している人を救済し、多くの苦しみから救い出した。今は重い罪を受けて太山(地)獄にいますのだ」と言つた。
 - (7) 帝釈天は聖なる志を聞き、後ずさりをして頭を地に叩きつけて言つた。「本当は布施をして衆生を慈しみ救済して、その結果、福から遠ざかり禍いを受けて太山(地)獄に入る者はいないのである」。
 - (8) (王は)近臣に命じて「あなたはすぐさま私を殺し、骨髓の重さを計り、鳩の重さと等しくさせなさい。私は諸仏を奉り、真実の重い戒を受け、衆生の危難を救おうと思つてゐる。多くの邪なるものによる悩みがあつたとしても、そよ風のよなものだ。どうして太山を動かすことなどできようか」と言つた。
 - (9) 帝釈天は重い毒を抱き持ち、悪行が熟して罪が決まり、太山(地獄)に生まれた。天・人・龍・鬼らは皆、それをほめた。たえた。
 - (10) 婆羅門たちは答えた。「太子の高徳の輝きは、あまねく八方に行き渡り、上は天上世界におよび、下は地下世界にいたり、

その高大なさまは太山のようであり、賛嘆しない者はおりません」。

- (11) 婆羅門は「私はあちらから来て、体中が痛み苦しんでいます。また、とても空腹で喉が渴いています。太子は輝かしい徳の香りを放ち、八方の人々が褒めたたえています。その高大な徳は遠くまであまねく照らすさまは、太山のようです」と答えた。

- (12) 仏のこの上ない誠の戒めを捨てて、鬼魅の偽りの言葉を信じました。酒におぼれ、淫らな遊びにふけり、あるいは一族を破滅させるまでの罪を犯しました。あるいは死んでから太山（地獄）に入り、その苦しみは数限りなく、生き返つて人になりたいと思う者もありますが、それはちょうど羽のない鳥が天に飛び立とうとするようなものです。

- (13) 仏が沙門たちに言われた。「その時の財産家は、今の私自身がそれである。あの放蕩者は、今の調達がそれである。鼠によって富をなした者は、今の槃特比丘がそれである。調達は、私の六億品の経を抱き持っていたが、言葉はそれに従つていても、行いは逆らつていて、死んでからは太山地獄に入った。槃特比丘は、私のわずか一つの言葉を大切に抱いていたことで、悟りを得ることができた」。

- (14) 菩薩は「言い値どおりの百万で」大いに結構だ」と答えた。ただちに言い値どおりに買い、魘（^{すゐん}）を持って家に帰つた。そして魘の傷を洗つて手当てをし、水辺に放つた。魘が泳ぎ去るのを見て、菩薩は涙ながらに喜び、誓願して「太山（地獄）の餓鬼や衆生たち、この世の牢獄に囚われた者たちが、速やかに苦難を免れて、安らかに身命を全うできることが、今のお前のようにでありますように」と言つた。

- (15) しかし、衆生が六欲に飢渴えるさまは、あたかも大海が数多くの川の水を受けてもまだ足らないのと同じで、そのためにしばしば太山（地獄）の炎熱を味わい、あらゆる苦しみを受けることになるのです。あるものは餓鬼道に堕ち、溶けた銅を口に流し込まれ、太山（地獄）で使役される。あるものは畜生道に堕ち、身体を屠られ割かれ皮を剥がれ、死ねば更に刃を受け、その苦痛は計り知れません。

- (16) 寿命を延ばしたとしても、福が尽きて罪報が訪れ、（天界から）降り太山（地獄）・餓鬼・畜生の世界に入ります。このようなことを苦しいのです。

- (17) 象は「私の痛みは耐え難いから、速やかに牙を取り去りなさい。私の心を乱して悪念を生じさせることのないようにし

てください。悪事を思念する者は、死んで太山(地獄)・餓鬼・畜生道の中に入ります。そもそも耐え忍んで慈悲を行い、悪心を持つ者がやってきても、こちらは善心で対応することは、菩薩のすぐれた行いです。……」と言った。

- (18) しかし、行幸の際に、付き従う者が極めて多くおり、先導する臣下たちが先触れを行って、民衆を恐れさせたという咎によって、死後に太山(地獄)に入り、身体を焼かれたり煮られたり切り裂かれたりすることが、六万年にも及びました。死を望んでもかなえられず、悲痛の叫びを上げても救われことはありませんでした。その時、私は、内には多くの肉親がおり、外には臣下や民衆がいて、資財は何億もの車に載せるほど多くあり、多くの楽しみは極まりがありませんでした。どうして彼らが私が死後に太山(地獄)に入り、身体を焼かれたり煮られたりして、多くの痛みを味わい、限らない苦しみを受けていることがわかったのでしょうか。私が生きていたときの栄華や、妻子や臣下・民衆たちが、私の地獄の苦しみを分かち取り除くことができたのでしょうか。そもそも地獄の苦しみは測り知ることでもないものです。それを思い出すたびに心は悼み、骨に激痛が走り、身体からは冷や汗が流れ、身の毛もよだちます。言葉が自分の口から出ると禍いが出て来ます。禍いは自分を追いかけてきて影のようにつきまとうので言葉を発しようと思いましたが、また過去世のように咎を得ることを恐れておりました。太山(地獄)の苦しみは、二度と味わうことなどできません。だから私は舌を縮めて、言葉を発しないようにしたのです。ところが、十三年たったとき、妖しげな導師(婆羅門)が大王に私を生き埋めにさせようとなりました。私は、大王が私を惨殺することで、太山(地獄)に墮ちる咎を得ることになるのを忘れて、やむを得ず一言、言葉を発したのです。

- (19) 私は沙門たちに言われた。「彌蘭とは私自身がこれである。なぜかと言えば、私が(仏・法・僧の)三尊を信奉していなかった時、愚かにも邪な教えを信じていた。そして母親が新しい衣類を身に着けて眠っていたところ、私は母親の頭を踏んでしまった。そのために太山(地獄)で燃えさかる鉄の輪によって自分の頭締め付けられることになった。

- (20) 私は沙門たち言われた。「彌蘭は太山(地獄)を出て、心の中の三悪(貪欲・瞋恚・愚痴)を閉ざし、言葉が招く四つの禍い(悪口・両舌・綺語・妄語)を絶ち、身体が引き起こす三つの咎(殺生・偷盗・邪淫)を抑えつけ、父母に対しては孝行を尽くして従順であり、三尊(仏・法・僧)を信奉した。……」。

- (21) もし他者がそれら(官位・爵位や国土)を持つているのを見たならば、愚かな者はすぐさま貪りと嫉妬の心を抱く。貪

りと嫉妬が心の内にあると、怒り怨みが外にあらわれる。このようなことは止むことがなく、正氣を失ってしまい、長い間、暗黒の状態になることになる。五道に輪廻し、太山（地獄）で焼かれ煮られ、餓鬼・畜生となつて、苦しみを積み重ねることは測り知れない」。

- (22) 婆羅門は（他人の蓮池の水を）飲み終わつてから、心に悟つて言つた。「あの池の持ち主はこの池を買い、（この池に植えた）花を仏廟に供えている。この水と蓮の実のはあの人自分が使うためのものなのに、私はその水を飲んだ。持ち主にこのことを言わなければ、盗みということになる。そもそも、盗みを犯したことによる禍いとして、死後、太山（地獄）に墮ち、次に畜生となり、市場で屠殺されて売られることで、前世の負債を償う。もし、人間として生まれ変わったとしても、奴婢となつてしまうはずである。私としては（早急に、盗みの罪を）今生で償い終えて、来世での患禍を残さないようにしたいものだ」。

- (23) 愚かな者たちは真つ暗闇の中にいて、何を行い、何を却けるべきかをわかつておらず、悪心を持つて仏や沙門に立ち向かう。（愚者たちによつて）婆羅門（梵志）が手を切られたり、舌を抜かれたりすることは、今生（一世）限りの苦しみである。しかし、妄りに手で打ち据えたり、口で嘘偽りを言つて誹謗すれば、（愚者は）死後、太山（地獄）に入ることになる。太山の鬼たちが舌を抜き、灼熱した砂の上にその舌を押しつけ、その上を牛で耕す。また、燃え立つた釘を、彼らの五体に打ち付ける。その時に、死にたいと願つても死ぬこともできないのだ。邪悪な行いに対する報いはこのようである。戒に順つて正しい行いをすべきであつて、邪なことはしてはならないのである。

- (24) 衆祐（仏）は「釈（迦族）の（過去世からの）罪業はここに終わり、（毘琉璃）王とその臣下の罪業はここに起こつた。今から七日後、太山（地獄）の鬼が、王とその臣下・民衆とを炎で焼くであろう。（毘琉璃）王の罪がすくい難いことは、あたかも釈（迦族）が禍いを払い除くのが難しかったのと同じである」と言われた。

- (25) 正午前になつて、太陽が姿を現し、陽燄（火起こしの鏡）に照りつけた。すると、陽燄は火となり、王が乗つた船から焼け始めた。太山（地獄）の鬼神たちが群れをなして集まり、国中に雷鳴が響きわたり、（毘琉璃）王たちは生きながら太山地獄に入った。

- (26) 王は驚いて、「これはなんと畜生でありながら広い慈しみの心を抱き、命をかけて他者を救い、それを難儀なこととも思

わなかった。これはきつと天（の神）であろう」と言った。王は鹿の言葉を良しと認め、喜んで徳行を進め、国内に、「今日以後、鹿がほしいままに食べるようにさせよ。あえてこの命令を犯す者があれば、その罪は死に相当する」と命じた。王は王宮に帰った。王妃は王が鹿を解き放したことを聞き、激しく怒って心が砕け、死んで太山（地獄）に入った。

(27) (菩薩が) 住んでいた国は、国王が無道で、財を貪って（女）色を重んじ、賢人を疎んじて民を卑しんでいた。王は無常を念じて、自ら「私は善からぬことを行っているから、死ねば太山（地獄）に入るであろう。どうして金を集めて太山王に貢ぐということをしないのか」と思った。そこで民の金を集め、「もし、わずかの金でも隠匿する者がいれば、その罪は死罪にあたる」と重い命令を設けた。このようなことが三年続き、民の金はすべて尽きてしまった。王は嘘をついて「少しの金を手に入れて王に貢ぐ者は、私の末娘と結婚させ、爵位を与えよう」と募った。童子（菩薩）は母に、「昔、金銭一枚を（亡くなった父の）口の中に入れ、太山王への賂としました。今でもきつとあるはずでしょう。取ってきて王に献上しましょう」と申し上げた。母は、「良ろしい」と言った。童子は、金を取って、王に献上した。王はどのようなして金を手に入れたかを尋ね、それを記録させた。童子は、「父が亡くなった時、金を口の中に入れ、太山王への賂としました。実は、大王が爵位を設けて金を求められていると聞き、墓を掘って棺を開き、金を取り出したのです」と言った。王が「父が亡くなってから何年になるか」と言うと、童子は「十一年です」と答えた。（王は）「お前の父は太山王に賂しなかったのだろうか」と言った。童子は「多くの聖人の書の中で、ただ仏の教えだけが真実です。仏教の經典に『善をなせば福が追いかけてくる。悪をなせば禍いがついてくる』と言っています。禍いと福とは、ちょうど影と響きのようなものです。身を走らせて影を避けたり、山を手でうつつ響きを止めようとしても、そんなことができるでしょうか」と答えた。王は、「できない」と言った。童子は、「そもそも身体は、四大でできています。命が終わると、四大はばらばらになり、靈魂は（身体から）離れ出て行つて変化し、生前の行為に従つて、行く所が決まります。賂にどんな意味がありましょうか。大王は前世に布施をして徳のある行いをし、今、王になることができました。また、仁愛を尊び、その恩沢は遠近とわず及んでいます。まだ得道してはおられません、後の世ではきつと再び王となられるでしょう」と言った。

(28) 調達もまた魔天王であつた。四天下を巡り、人びとに対して心の欲するままに悪事を行つても、太山（地獄）の殃禍の

報いはないと教えた。調達は、巡っている時に菩薩に出会った。(調達は菩薩に)「あなたは何をしていますのですか」と尋ねた。(菩薩は)「民に仏を奉じ、上聖の徳を修めるように教えている」と答えた。調達は、「私は民に欲望を恣にしても、現世と来世の二世にわたつて禍いなく、善を行ひ志を守ろうと苦勞しても、自分自身に何の益もないと教えている」と言つた。菩薩が、「あなたは、私の通る道を避けなさい」と言つと、(調達は)「あなたが善を行うことは、ちょうど金銀のやうなものだ。私が悪を尊ぶことは、ちょうど鋼鉄のやうなものだ。鋼鉄は金銀を切ることができるが、金銀は鋼鉄を切ることができない。あなたが道を降りなければ、私に斬られることになる」と答えた。調達は悪事を盛んに行つて禍いが生じ、生れ変わつても太山(地獄)に入つた。

(29) 兄は言つた。「そもそも、一人の人間を殺すと、その罪は百劫の間、続く。龍は一国の人を呑み込もうとしている。私は恒沙(ガンジス川の砂)ほどの無数の劫が過ぎてても、その禍いは除かれないのではないかと恐れている。(あの国の人たちは)苟も、珍しい食べ物やわずかの時間の利益を貪つて、太山(地獄)で焼かれたり煮られたりする罰に目を向けようとしな。私は不慙に思う。……」。

(30) 菩薩の心は清らかで、かの四禪を得て、すべてが思いのままになり、身輕に飛び上がり、水の上を行き、あちこちに分身を作り、さまざまに変化する。隙間ないところにも出入りして、存亡自在である。太陽と月を手で触り、天地を動かして、すべての物事をどこまでも見通し、聞き通して、聞見しないものはない。心は清らかで、見ることは明らかで、一切智を得ている。まだ天地がない時のことや、衆生がこれまでに経てきたこと、十方に今生きている衆生が心に念じていること、まだ萌していないこと、衆生の靈魂が天となり人となり、太山(地獄)・餓鬼道・畜生道の中に入り、福が尽きて罪を受け、禍いが終わつて福を受けたことなど、どんな遠いことでもすべて知つてゐる。

(31) 道(を志す)人は「そもそも生まれれば必ず死というものがある。人も物も幻のやうなものだ。会えばすぐに別離があり、靈魂は逝き、身体はバラバラになる。私だけがどうしてそれを止めて、あのやうにならないようにすることができようか」と念じ、それを見て、悲しみ悼み、一心に禪定を行う。ある人は死んでから長い時間がたつて、身体の骨が消滅し、泥土の中で塵と同一になるのを見て、「私の身体も必ずこうなる」と深く思惟し、一心に禪定を行う。ある人は、太山(地獄)の湯火の苦しみ、身体を酷く引き裂かれる苦痛、餓鬼道の何年も続く飢饉の苦勞、畜生道の殺され身を割られる苦し

を聞き、そのことを思つて愕然として、一心に禪定を行う。

- (32) 仏を奉じ經を見、沙門たちに親しみ、仏の戒めを選び取り、大切にして実践し、三惡を遠離し、心に善を念じ、口に善を言い、身には、善を行う。上の三惡を抑えて、長く三善を榮えさせ、長く太山(地獄)・餓鬼・畜生の苦しく険しい所を経ることなく、極まりない幸福の場所に落ち着かせる。

- (33) 『リグ・ヴェーダ』では、妹ヤミールと双生で、自ら死を選び冥界への見いだした。『アタルヴァ・ヴェーダ』では死界の王としてのイメージが中心となる。

- (34) 井本英一「閻魔―始原と終末の王―」(坂本要編『地獄の世界』北辰社、一九九〇年、所収) 参照。

- (35) 当該經典では、本地仏が当てられる。また、日本語の混入も見られる。

- (36) 十王信仰については、拙論「仏教と道教の十王信仰と儀礼」(『豊山学報』六四号、二〇二一年)に詳細に論述した。

- (37) 講談社『原始仏典』巻一〇、二四四頁、第二章五二偈。

- (38) 仏足礼については、高橋尚夫「悉曇」(『宗学研修会紀要』創刊号、真言宗豊山派、一九九四年) 参照。

- (39) 藤野岩友『中国の文学と礼俗』(角川書店、一九七六年) 参照。

- (40) 楊聯陞「道教之自搏與佛教之自撲」(塚本博士頌壽記念『佛教史論集』所収、一九六一年) 参照。

- (41) 楊聯陞「道教之自搏與佛教之自撲補論」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第三四、一九六二年) 参照。この論中に胡適の評論を載せる。

- (42) 吉岡義豊「自搏と自撲について―楊聯陞教授の論説によせて―」(佐藤博士古希記念『仏教思想論叢』山喜房仏書林、一九七四年、所収、『吉岡義豊著作集』巻二、五月書房、一九八九年に再録された。本稿は後者による) 参照。

- (43) 成瀬隆純「中国浄土教と自撲懺悔」(『フィロソフィア』第七一号、早稲田大学哲学会、一九八三年) 参照。

- (44) 拙論「五体投地・如太山考」―拝礼の中国的展開―(『東方宗教』第八九号、日本道教学会、一九九七年) 参照。

- (45) 遠藤純祐「占察善惡業報經」の信仰―民衆に受容された隋代仏教の一樣相―(『現代密教』通号二三、智山伝法院、二〇〇〇年)。この論考は道教文献にも論究しているが、註四〇～四四の先行研究については言及はない。

- (46) 山田俊「『太上帝玉清經』の成立について」(『東方宗教』第八八号、日本道教学会、一九九六年) 参照。

- (47) 山田利明「道教における齋法の成立」(『アジアにおける宗教と文化』東洋大学東洋学研究所篇、一九九四年) 参照。
- (48) 藤野岩友『中国の文学と礼俗』(角川書店、一九七六年) 三四七頁参照。
- (49) 藤野岩友『中国の文学と礼俗』(角川書店、一九七六年) 三五八頁参照。この他に、藤野は「頭を露にし肉袒し、頓頭(頓首)して血を流す」(『風俗通』一〇反)、「叩頭して血を流し枉状を訴言す」(『後漢書』卷五八、虞詡傳)、「叩頭して血を流し、言涕と並にす」(『呉志』卷六、呉範傳)、「恐懼して頓首して血を流す」(『舊唐書』卷八四、裴行檢傳)、「叩頭血を流して、然る後に免かるることを得たり」(『北史』卷一四、后妃傳下)などの用例を示す。
- (50) 福井文雅は、塗炭斎を「道教徒が病気を避けて長寿を祈り、またあらゆる危難から逃れるために罪を逃れるために罪を悔い改める斎」と解説する(『道教事典』平河出版社、一九九三年)。
- (51) 土屋昌明「後漢における思過と首過について」(『道教文化への展望』平河出版社、一九九四年、所収) 二八〇頁参照。
- (52) 大形徹「被髮考」(『東方宗教』第八六号、一九九五年) 参照。
- (53) 安居香山・中村璋八編『重修緯書集成』卷六(明德出版社、一九七五年) 一八六頁参照。
- (54) 佐藤智水「北魏末の大乗の乱と災害」(『岡山大学文学部紀要』第一四号、一九九〇年) 一三四〜一三六頁参照。
- (55) 「天行病」は、季節性の感染症と思われる。
- (56) 佐藤智水「北魏末の大乗の乱と災害」(『岡山大学文学部紀要』一四、一九九〇年) 一三四〜一三六頁参照。
- (57) 小島毅「中国の古地震について―サステイナビリティ研究の視点から―」(『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』『文化交流研究』三〇 二〇一七年) 参照。